

IEA「中期石油市場報告」に見る国際石油情勢のポイント

一般財団法人 日本エネルギー経済研究所
常務理事 首席研究員
小山 堅

5 月 14 日、IEA が 2018 年までの世界の石油需給見通しをまとめた「中期石油市場報告 (Medium-Term Oil Market Report)」を発表した。IEA の (石油) 市場見通しとしては、毎月発表される 1-2 年先までを見通す「月次石油市場報告」(短期見通し) と、毎年 IEA の「フラッグシップ成果物」として発表され 2035 年までの長期見通しをまとめる「世界エネルギー展望 (World Energy Outlook)」が著名である。しかし、今回最新版がほぼ 1 年ぶりに発表されたこの「中期見通し」も、世界経済の中期トレンドや石油市場における投資サイクル (5 年程度先までの計画・プロジェクト等の織り込み) を勘案した見通しとして、関係者の注目を集めるようになってきている。今回の見通しを参照しつつ、今後 2018 年までの国際石油情勢のポイントを概観してみたい。

今回発表の中期見通しの最大のポイントは、昨年の中期見通しと比較して、豊富な非 OPEC 供給の拡大、特に米国の軽質タイトオイル生産の拡大によって、世界の石油需給ファンダメンタルは緩和の方向に変化しつつあることを示唆していることであろう。もちろん、実際の石油市場で何が今後 5 年間で発生するかを正確に予測することは至難の業である。しかし、現在足下で起きている様々な事象を踏まえると、中期トレンドとして読み取れるのが、上述の需給変化、ということになる。

まず、需要面からポイントを探ってみよう。この「中期見通し」では、世界の石油需要は 2013 年の 9060 万 B/D から 2018 年には 9670 万 B/D に拡大すると予測している。5 年間の需要増分は 610 万 B/D、1 年当たりの平均増分が 122 万 B/D という増加であるが、これは、2012 年の増分が 83 万 B/D、2013 年の増分が 82 万 B/D であることから見ると、中期的には世界経済の成長の下で石油需要は堅調に増加する、との想定に立っていることが読み取れる。他方、比較可能な 2017 年の数値を見ると、昨年の見通し (9568 万 B/D) に対して今年の見通しは 9560 万 B/D と若干の下方修正となっている。しかし、地域別の内訳には大きな差が生まれており、今年の見通しでは、OECD の需要については、69 万 B/D の下方修正となったのに対し、非 OECD の需要は 62 万 B/D の上方修正となった。この 1 年間の世界経済動向、自動車燃費改善等を踏まえた見直し (上方・下方修正) である。OECD 需要の下方修正も興味深い。非 OECD についてさらにブレークダウンすると、計 62 万 B/D の上方修正のうち、半分の 31 万 B/D がアジア需要の上方修正、そしてそれを上回る

35 万 B/D の上方修正がアフリカの需要見通しについて行われている。昨年見通しと大きな変化が生じているという意味において、今後の OECD、アジア、そしてアフリカの石油需要動向に注目していく必要があるだろう。

全体として、世界の石油需要見通しが若干下方修正される中で、非 OPEC 生産見通しはこの 1 年で大幅に上方修正されるに至った。比較可能な 2017 年について見ると、今年の見通しにおいては、非 OPEC 生産は 5862 万 B/D と昨年見通しから 109 万 B/D も上方修正されている。高い原油価格が続く中で、増産傾向を示す非 OPEC 産油国が多く見られるようになってきているが、やはり増産の中心は米国であり、その中でも軽質タイトオイルの増産が顕著である。米国の石油生産は 2013 年の 1000 万 B/D から 2018 年には 1192 万 B/D まで 192 万 B/D 増産する見通しであるが、同期間の軽質タイトオイル生産は 170 万 B/D から 400 万 B/D まで 230 万 B/D の大幅増産となり、まさに米国生産の増加を牽引することになる。この米国軽質タイトオイルの大幅増産も、この 1 年間実際の市場において発生しつつある事象を踏まえて、中期見通しの上方修正につながったものであることはいままでもない。

需要の若干の下方修正に加えて、非 OPEC 生産の上方修正が行われることで、「Call on OPEC」（OPEC 原油への需要）が下方修正されたことが今年の「中期見通し」の特徴となった。また、昨年見通しと比較可能な 2017 年について見てみると、Call on OPEC は 2999 万 B/D と昨年見通しに比べて 122 万 B/D も下方修正された。また、Call on OPEC の絶対水準で見ても、2012 年 3012 万 B/D、2013 年 2959 万 B/D と比較して、2017 年（前掲）も、2018 年（3037 万 B/D）もほぼ横ばいであり、今後 5 年間、OPEC 原油への需要は増加しない、という OPEC にとっては厳しい見通しである。

この状況下、OPEC 内ではイラクの生産能力増強が続くものと予想されている。イラク政府による公式な計画通りに増強が進むかどうかは別として、着実に生産能力が増える方向であることは確実であろう。今回の「中期見通し」では、イラクの石油生産能力は 2013 年の 352 万 B/D から 2018 年には 476 万 B/D まで 150 万 B/D 以上の大幅拡大を見込んでいる。イラクの治安状況、国際石油会社等による生産能力拡大投資の進捗状況、輸出関連インフラ整備状況などによって、実際の生産能力拡大、そして生産・輸出拡大は大きく左右されることになろうが、イラクの増産がこの需給見通しの環境下で市場に大きな圧力を発生させる可能性は十分にありうる、と見てもよいであろう。

2011 年から続く、100 ドル超の高原油価格環境下で、国際石油市場には様々な需給変化の兆し・事象が生まれつつある。とりわけ増産著しい米国の軽質タイトオイル（及びシェール革命全体）による国際エネルギー市場への広範な影響は今後も大いに注目する必要がある。増産傾向を持続するイラク、という要素を抱えた OPEC にとっては、中期的にも国際石油市場の環境は不透明感を増しており、今後の需給問題についての様々な課題が徐々に積み上がりつつあるとあって良いのではないだろうか。

以上

お問い合わせ : report@tky.ieej.or.jp